広島大学現代インド研究 ― 空間と社会　Vol.11: 49-51, 2021
Journal of Contemporary India Studies: Space and Society, Hiroshima University

書評 Book Review

石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編
『ようこそ南アジア世界へ』

昭和堂　2020 年　p.290　ISBN978-4-8122-1918-8

陳　林*

本書は，人間文化研究機構地域研究推進事業「南アジア地域研究」の元研究員 3 名により編著されたものであり，若手研究者も多数その執筆に携わっている。そのため，本書を通して，新鋭の研究者が南アジア地域研究のどこに着眼しているかを読み取れる。また，執筆者の多くが「南アジア地域研究」に関わっているため，本書は同プロジェクトの研究成果の 1 つとして位置付けることができる。

本書は 14 章と 14 コラムから構成されている。序章では南アジア研究の醍醐味が説明されている。その後，第 1 ～ 11 章は地理学，歴史学，宗教学，インド哲学・思想史，政治学，経済学，文化人類学，社会学，教育学，社会福祉学などの専門分野からの知見がまとめられている。第 12 章は「南アジア」と異なる地域区分方法が紹介されている。第 13 章では南アジアと日本の関係史が概説されている。各章の後にはそれぞれのトピックに対応したコラムが掲載されている。具体的には，カレー，環境問題，印パ分離，音楽，文学，インド憲法，土地，エネルギー問題，観光，スポーツ，高齢者，インド映画，芸能，南アジアと中国が取り上げられている。章構成は以下の通りである。

序　章：南アジア世界の醍醐味
第 1 章：地理―厳しい自然環境，急増する人口，変貌する都市
第 2 章：歴史―多様性社会の挑戦と葛藤の軌跡
第 3 章：宗教―さまざまな信仰が共存する南アジア
第 4 章：哲学・思想―現代に息づく伝統思想の世界
第 5 章：政治―多様な経路をたどる南アジアの民主主義
第 6 章：経済―人びとの生活の質を問う
第 7 章：産業―サービス産業の発展と工業の停滞
第 8 章：社会―多様な人びとが織りなす暮らし
第 9 章：ジェンダー―政治化される身体
第 10 章：教育―高まる教育熱の行方
第 11 章：文化―人びとが日々生きている多様性
第 12 章：連環地域・世界―インドを“中心”にしない「地域」の切り取り方
第 13 章：南アジアと日本―イメージと現実の交錯

序章では，南アジア地域研究の基本と醍醐味が解説された。南アジアを理解するには「多様性」と「変化」が重要なキーワードである。また，南アジア地域研究の「地域（area）」は国家より大きく，地球全体より小さい単位とされる。そのうえで，地域研究は世界を「地域」の集まりとして捉える点に特徴があるという。さらに，地域研究は伝統的な個別専門分野にまたがった「メタ」レベルの学問領域とし，「総合的理解」，「相互理解」，「フィールドワークを通じた出会いと対話」が重視されている。

第 1 章は，南アジアの多様な地形と気候が豊穣な大地を育んできたが，ときには甚大な自然災害を発生させてきたことを述べた。こうした環境のもとで人口は着実に増加し，地域的な偏りが大きいことが明らかにされた。また，大都市を中心に急速な経済発展を遂げてきた一方，地域間格差の拡大も進行していることが説明された。

第 2 章は，南アジアの歴史を古代，中世，近現代に区分し，各時期の特性を捉えた。古代の南アジアではインダス文明とガンジス文明が誕生し，交易路をへてアジア各地に伝播した。中世の南アジアは特色ある文化が生まれ，南アジアの多様性が顕著になった時代である。また，政治的分裂はそれまで文明の先進地域であったガンジス川流域に代わり，「周辺」とされてきた地域が地域国家のもとで繁栄した。近現代はイギリスの植民地支配による南アジアの近代化とナショナリ

* 華南師範大学地理科学学院

ズムに特徴があり，植民地支配の終焉に伴って多くの問題が顕在化した。

第 3 章は，南アジアの多宗教社会が説明された。まず，インドの多数派たるヒンドゥー教は多神教，ヒンドゥー教徒の実践と慣習，牛の神聖視，文化輸出の資源である伝統的なヨーガに分けて解説された。続いて，南アジアのイスラームについては主にインドのイスラームおよび，それがインド社会にもたらした影響，バングラデシュとパキスタンのイスラームから説明された。その後，南アジアにおけるジャイナ教，シク教と仏教の展開も描かれた。最後に,「インド的」セキュラリズムは公的領域においてあらゆる宗教が尊重され，公平に扱われると理解されているが，公的領域から宗教が撤退することを意味しない。また，近年のインド社会においては，コミュナリズムの問題が深刻化しているという。

第 4 章では，インド思想の歴史は常に人々の信仰のあり方と深く関わっていることが述べられた。インドの古代思想は，個人の理想的終着点として解脱を追求した。近世のヒンドゥー思想はイスラームとキリスト教と出会い，個人と超越的な神との間の関係性が模索された。近代化以降，人々の関心は現代的なものへと変容したが，超越性や聖なる倫理に対する信頼は揺らぐことがなかったという。

第 5 章は，多様な経路を辿る南アジア諸国の民主主義が示された。パキスタンとバングラデシュは独立後民主政と軍事政権が繰り返されてきた。スリランカとネパールは内戦が続いたが，その終結をへて民主政の定着およびその維持に取り組んでいる。インドは独立以来一貫して民主主義体制を維持しているが，その動態を理解するには政党政治だけでなく社会運動に着目する必要があるという。また，南アジア諸国の国際関係は地域内におけるインドと周辺諸国との緊張と対立，およびインドとアメリカ・中国間の複雑な関係が示された。

第 6 章は，1980 年代の経済改革によるインドの経済発展が注目される一方，カーストにまつわる格差とジェンダー問題，そして貧困など無視できない課題が依然として多く残っている点に焦点が当てられた。教育は人々の所得を増加させるのに重要な鍵と指摘された。

第 7 章では，南アジアにおける産業の特徴は，製造業を中心とする工業の成長が伸び悩み，サービス産業の成長が継続していることをあげた。一方，総生産に占めるシェアが低下している農業には依然多くの労働者が滞留している。また，南アジア諸国では，工業よりサービス業の方が農業労働者を多く受け入れているが，労働者に安定的な仕事が十分に与えられていないという。そのため，今後の南アジア経済にとって製造業の成長を促進する政策は重要であると指摘された。

第 8 章は，カーストに焦点を当て，南アジア社会の「多様性」と「集団性」を捉えた。カーストの影響のもと, 南アジア社会における濃密な縁戚関係, 同一カーストの内婚制と婚姻をめぐる問題，縁戚関係を取り結ぶ宗教礼儀の様相が紹介された。そのほか，インド社会の留保制度，被差別民の自己主張と意識，および他者認識であるカテゴリーとの齟齬も解説された。最後に，不可触民の社会運動および集団の属性を超えて展開される運動を取り上げ，南アジア社会における多様な声および社会の変革を志向する様相が多く認められたことが示された。

第 9 章ではジェンダーをめぐる諸問題が取り上げられ，南アジアでは家父長的な社会を背景として，女性は私的領域にとどまり，母と妻としての役割を担うことが期待され，ジェンダーと身体を切り離して考えることができないという。また，女性の身体はジェンターにまつわる権利やイデオロギーが競い合う場として論争の的となってきた。最後に，インドを中心に女性の身体を取り巻く様々な事象の歴史的展開と今日にいたる葛藤が描かれた。

第 10 章は，教育に熱い期待が寄せられているインドを取り上げ，高等教育の少数エリートから大衆へのシフト，基礎教育における学校の多様化と階層化への変容，学校に通えない時代からより良い教育を求める時代に移りかわっていることが説明された。

第 11 章は，文化の観点から，南アジアの人々が暮らす様相の一端を描いた。国民文化やアイデンティティを主張するために持ち出された文化は自分と他人との差異を明確にするために客体化されたものであり，閉鎖的なものであるとされた。一方，時には客体化された文化の閉鎖性を乗り越えようとする人々の実践は，グローバル化によって複雑になっていく南アジアの状況を様々な方向へ導くという。

第 12 章は，インド以外の南アジアの「マイナー」な国や領域に光を当てるため，南アジア地域に接していたり重なっていたりする別の「地域」や「世界」の切り取り方が紹介された。具体的には，聖山の目差しの歴史から考える「ヒマラヤ地域」，国家の支配に対抗する山岳地帯である「ゾミア」，海を舞台とする南アジアの人々の営為を把握できる「環インド洋地域」，言語や国境を越えたグローバルな共同体として認識された「イスラーム世界」，より広がりのある可変的・

動態的な視点で南アジア地域を捉える「南アジア系移民の世界」が紹介された。

第13章は，南アジアと日本の関係史を振り返った。古代から中世にかけて，インド文化は仏教を通じて日本に大きな影響を与えた。明治から第二次世界大戦までの日印関係は政治や思想，文化面の交流より，経済関係が突出した地位にあった。第二次世界大戦中，日本と南アジアは直接間接に濃密な接触がなされた。戦後になると，日本と南アジアは経済協力という新たな関係が結ばれた。2000年代以降，南アジアと日本は人・物・カネ・情報などの国境を超えた移動が質量ともに増大していく段階であるという。

以上，本書の内容を簡単にまとめた。本書に関しては，下記のような特色があげられる。1つ目は，南アジア地域研究の初心者にむけてさまざまな工夫がなされたことである。例えば，章の本文に入る前に，内容の要約が提示されている。同時に，読者の関心を惹きつけるため，章の内容に反映する写真が掲示されている。また，章の終わりにそのテーマにふさわしいコラムも提示され，内容のさらなる理解に貢献している。2つ目は章の内容をより深く追求したい読者のために関連の書誌情報が提供されている点である。このことによって，本書は南アジア地域研究の初心者だけでなく，南アジア地域の研究に取り組んでいる読者にも視野に入れていることが伺える。3つ目は本書が新鋭の研究者の手によって南アジア地域の事情を包括的かつ分かりやすくまとめられている。そのため，本書は南アジア地域の初心者にとって最新の成果を把握できる便利な1冊である。

一方，本書に対しては若干の要望もある。1つ目は，それぞれの章の内容が独立しており，章間の相互照合があまりなされない点である。地域研究は分野にまたがる学問のため，それぞれの章の内容をより意図的に連携すれば，南アジア地域に関する読者の理解の深化につながるのではないかと考える。2つ目は，本書は南アジアの特色あるトピックに注目しているが，系統的に南アジア地域の変化を捉え切れていない点である。人，物，情報，資本における移動の増大は南アジア地域の社会的・経済的側面に大きな変化をもたらしている。これらの変化に関する内容は本書にもう少しあれば良いのではないかと考える。

以上，本書に対して若干の要望を述べたが，これらの点は決して本書の価値を損なうものではない。本書は，南アジア地域研究に関心のある学部生だけでなく，地理学，歴史学，宗教学，経済学，政治学，文化人類学，社会学などの分野の研究に取り組みたい方々にも参考できる点が多い。ぜひ一読を勧めたい。

（2020年10月26日受付）